



# わかば

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm> 毎週火曜日更新

幼稚部の書き初め

## 書き初め



今年、「書き初め」(かきぞめ)をした人は何人いるでしょう。「書き初め」とは、新しい年になって初めて筆墨で文字を書くことを言います。1月2日に行われることが多いのですが、「仕事始め」とか「稽古始め」も同様です。

最近では、家で書き初めをする事が少なくなり、色々な団体が催す「書き初め大会」等に参加する人が多くなってきました。かつて書き初めといえば、学問の神様、菅原道真の肖像画の前で、おめでたい文字を書き「字が上手になりますように。」と、お願いするのが習わしでした。そして、その作品をどんど焼きの火の中に入れ、紙が高く舞い上がると字が上達すると考えられていました。今でも、この風習が残っているところがあるそうです。また、7月7日の七夕に、サトイモの葉に溜まった露を集めて墨をすり、その墨で文字を書くと上達するという言い伝えもあるようです。これらのことから、昔から、文字を上手に書きたいという願を持つ人たちが、たくさんいたということが分かります。

文字は、自分だけが読めたらいいというものではありません。人が読めて初めて伝達の手段としての文字の働きをするのですから、読みやすい(上手な)方が良いに決まっています。では、どうすれば文字を上手に書けるようになるのでしょうか。それには特別な秘訣などありません。たくさん書けば上達するかというと、そうでもありません。大切な事は、「上手になりたい。」と思って練習する事と、日頃から読みやすい文字を書くように意識することです。自分のノートを見直してみましょう。自分にも、人にも、読みやすい文字で書かれているでしょうか。

## 入園・入学希望者説明会開催!

先週の土曜日、1月16日、2016年度に向けて、幼稚部入園・小学部1年入学希望者説明会を開催致しました。説明会では、教育委員長の永坂孝様より、本校の運営方針や目的について説明していただくとともに、学校や面接に関わっての説明をさせて頂きました。

本校の目的は、「帰国後日本の教育に円滑に適応することが出来るような学力をつける」ことにありますので、「日本語の語学学校」ではありません。日本語を学ぶというより、日本語で学ぶ学校です。授業に必要な日本語力はご家庭で習得して頂かなくてはなりません。また、小学部では週1回の授業を補うため、宿題(プリント、学習帳、音読、日記、等)が出されますが、これもご家庭で指導して頂くことになります。

日本人学校は、商工会に設置された教育委員会により運営されておりますが、教育委員の皆様には、全員がボランティアとして、年間を通して本校に貢献していただいております。同様に、保護者の皆様全員にも学校行事などの企画、運営を担当して頂いております。本校の運営には、保護者の皆様のご支援とご協力が欠かせません。

小学部入学テストは2月3日(水)に、幼稚部入園面接は2月12日(金)に、どちらも商工会事務所で行われます。



# 児童生徒作品より

学芸会

小学部5年1組 石井理奈

学芸会の後、いろいろな人達に

「五年生の歌、すごくよかったよ。」

「日本の少年少女合唱隊みたいだった。」

と言われて、うれしくていい気分だった。

今年の学芸会で、わたし達は、『冬景色』と『世界で一つだけの花』を合唱した。

本番で赤いまくが開いた時、急にきんちょうしたわたしは、冬景色の曲しようかいの

「一番では早朝の入り江」

を、中くらいの声でしか言えなかった。でも、歌になると練習の時に先生から教わったことが自然にできた。

「声を目の前のかべにぶつけるように！」

「おなかから声を出して！」

そのおかげで、とても大きな声で歌えた。

何度も練習したこの二曲は、わたしがおとなになってもわすれずに歌えると思う。五年生の思い出も、その時思い出さう。



「扇の的」を読んで

中学部2年1組 河畑海渡

「扇の的」の話の中で、一番印象に残った場面は義経の最後の行動だ。落とした弓を命がけで拾いに行ったことに驚き、とても勇気があるなと思った。なぜそんなことをするのか不思議にも思ったが、理由を読んだらなるほどと感心した。弓がもったいないからではなく、敵に自分の弱い弓を拾われてばかにされるのが悔しかったからだ。これが武士というものなのかと思った。武士には武士道という道徳がある。義経はこの教えの中で最も大切な「名誉」を頭に入れながら弓を拾いに行ったにちがいない。義経は自分の名誉と源氏一族の名誉を守ったのだろう。

もし僕が義経なら弓を命がけで拾いに行ったのだろうか。僕が拾いに行ったとしても弓がもったいないからという理由だろう。その前に命をかけて拾いに行く勇気が出たのだろうか。そんな僕がこの話を読んで、義経はカッコいいと思った。名誉のために命をかけるなんて僕には想像が出来ないけれど、武士には普通だったのだろう。義経は家来たちのお手本であり、皆尊敬していたことだろう。

古文は、一見難しいように見えるが、話の内容は意外にシンプルでおもしろい。昔の人の考え方と現代の人の考え方は違うところもあるけど、同じところもある。それを学ぶことが古文の楽しさの一つだと思う。

「扇の的」を読んで

中学部2年1組 飯嶋ころろ

「扇の的」は、平家追討軍の奇襲に遭って屋島に退いた平家と、そこに攻め寄せた源氏がそれぞれ沖と陸で対峙した場面での話だ。

私は元々古文が苦手で、この物語を初めて読んだ時も、話の内容や意図が分からなかった。しかし、何回か物語を繰り返し読んだり、物語には書かれていない部分を知っていくうちに、この場面には大勢の人の心情が描かれているということに気がついた。

例えば、義経が与一に「扇を射落せ」と命じる場面には、与一を見守る源氏と神に祈りを捧げる与一、その後には見事に扇を射落して見せた与一に感嘆する源氏と平家の様子が描かれている。

もう一つ印象に残ったのが、表現の仕方だ。沖と陸、ふなばたとえびらなど、この話には表現方法として、「対比」がよく使われている。また、この対比に言葉だけではなく色を使うことで、読者が自分でその情景を思い浮かべながら物語を楽しむことができるようになっているのだ。

私はこの物語を読んで、古文の面白さと表現の大切さを知ることができた。